

記に堀小橋江とあるは、即この猪甘津の江なれば、大和川も其所にて、百濟川、狭山川に合て、一流は上古の堀江を西に流れ、一流は今の猪飼村と、猪甘岡の間を経て北に流れて、山城川と合て、海に入れりとおもはるれば、今も故大和川とこれり、その江の長きをもて、名におふし、にもやあらむ、中略長柄橋の遺跡は郷人の言に、長柄村の東に橋寺といふ村あり、これその舊地といひ、いにしへの橋柱も彼所に有といへり、又彼橋柱は、この長柄村橋寺村の間こ、かしこより堀出せり、その所凡壹里今の里許が間なり、まかばかり長き橋の有べきにもあらねば、元來その地は洲濱にて、こなたかなたの島々に、あまた架せる橋を、なべて長柄の橋とはいへるなるべしといへり、これみなうきたる言にして、すべて信がたし、日本後紀、文德實錄にいふ所、一の橋なる事いちぢろきを、をや、按に、これも長江に架せる橋にして、猪甘津の小橋は、即この長柄の橋なるべく、小橋江は即この長柄なるべし、小橋の小ハ、小國小田などいさるを柄を江の假字に用たる舊證ある事をおもはず、長良とのみ訓來れる中古の言にひかされ、且長良村の名にか、づらひて、郷人のあらぬ地をまさぐりをるこそいとをこなれ、古昔の歌に、ひとつも長柄川とよめるなきは、もと長江なれば、ナガラエ流江に川とはいふまじき故もやあるらん、

〔日本後紀二十三〕弘仁三年六月己丑、遣使造攝津國長柄橋、

〔康富記〕嘉吉三年四月二日丁亥、參伏見殿有御讀宮御方被語仰下云、昨日被注下長柄橋事、中弘

仁三年に造らる、よし國史に見えたれば、中弘弘仁は新造歟、修造歟、不可辨之由も見えたり、又古老傳に人柱たてられたりともみゆ、最初の事ともみえず、密勘の註にハ子負たる女をとらへて人柱にたてたりと云へり、今程猿樂などの能には、男を人柱にたてられたりともみゆ、凡長柄橋の事、古の歌仙も在所をば慥ニ不知云々、わたの邊のあたりにかけたる橋云々、

〔攝陽群談十二〕大願寺 同成西郡佛性院村ニアリ、中嵯峨天皇ノ御宇弘仁三年壬辰夏六月、